

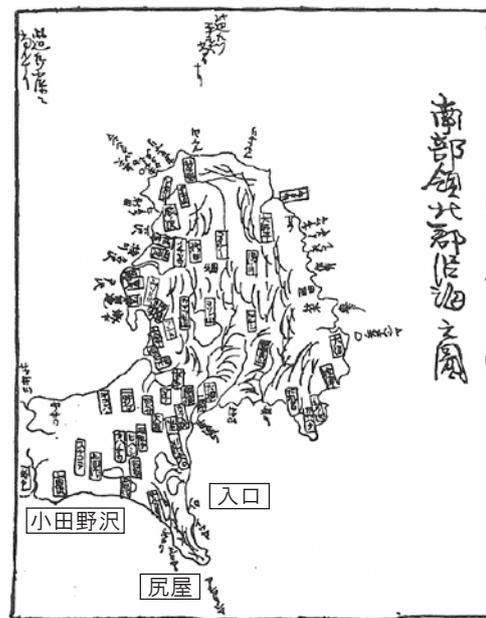
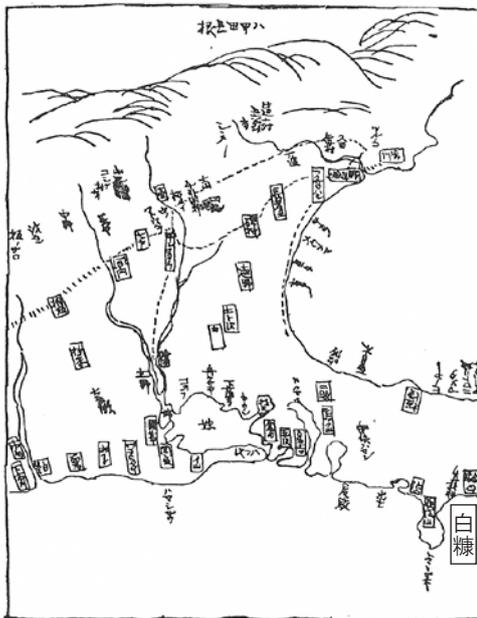
「松浦武四郎（まつうら たけしろう）」

「今昔物語」

松浦武四郎は江戸時代の探検家で『北海道』の名付け親として有名です。天保4年（1833）から国内を歩きまわり、177年前の弘化元年（1844）11月7日に東通村へ足を踏み入れました。

松浦武四郎の旅行記の1つに『東奥沿海日誌』があり、入口村では恐山で知り合った大館屋清兵衛宅に泊まったと書いています。岩屋村では昔、洞窟に鬼神が住んでいて人々を悩ませていたが、源頼義が退治したという話を載せています。尻屋村では焼飯を子供に与えると親からお返しにとお盆一杯に盛り上げたアワビを御馳走になった話や、尻労村へむかう途中まで荷物を背負ってくれた御礼のお金を決して受け取らず、別れがたいと涙する村人の姿に感銘を受けた話も載せています。尻労村では村長宅に2泊し、浜辺に『寄り鯨（よりくじら）』の骨が沢山見えていると書いています。猿ヶ森村では『根木（ねぎ）』という大きな木が埋もれている様子を記していて、ヒバの埋没林が当時から有名であったことが分かります。小田野沢村では村長宅に泊まり『たばこ』を売る店が1軒あると書いています。白糠村では飯炊き釜に潮を汲んできて、焼いて塩を作っていることを紹介しています。

このように松浦武四郎が詳細な記録を残してくれたおかげで、江戸時代における東通村の生活や村民との心温まる交流の様子を知ることができます。



南部領北郡沿海之圖



東通村 公式LINE 友だち募集中！



友だち登録していただくと、村からの情報がプッシュ通知で届きます！



LINEアプリから東通村または、ID: [@vill.higashi](https://line.me/tvill/higashi) で検索いただくと公式アカウント欄に出ます。

右のQRコードからご登録いただけます。

